

フィリップ・シドニーに就いて

岡 橋 祐

フィリップ・シドニー (Sir Philip Sidney) は一五五四年に生まれ、一五八六年に戦傷のために死んだ。その生存の期間は僅かに三十二年間にすぎない。彼の生涯は外面的な波瀾に富んだ面白さがなく、幅と広さを欠くが、清純にして謹厳であり、しかし偏狭でなく、教養はその経歴が示すが如く、英国的であると共に、ヨーロッパ的であった。

彼はエリザベス王朝時代の代表的な騎士的宮廷人であり、政治家であり、外交官であり、また詩人であり、詩論家でもあった。

シドニーの生涯はその年代の示す通り、エリザベス女王の御代に包含される。エリザベス女王の父であるヘンリー八世の死んだのは一五四七年であり、エドワード六世（一五四七—一五五三）（母は Jane Seymour）¹⁾ エリザベスの異母弟）と、メアリ（一五五三—一五五八）（母は Catherine of Aragon）²⁾ エリザベスの異母姉）の二つの短かい治世を経て、エリザベスが二十五歳で即位したのは一五五八年であり、それはシドニーの生後四年を経た年のことであった。また英国艦隊がスペインの無敵艦隊を破って海上権を確立したのは一五八八年でシ

ドニイの死後二年経つてからであつた。

一体、エリザベス王朝時代と云うのは、英国の歴史に於てどういふ時代であつたか。その特徴を一言で言えば、民族意識の昂揚と個人意識の發揚である。この点に就いて、G. M. Trevelyan は次のように言つてゐる。“For centuries past many different forces had been slowly drawing the English towards a national or patriotic conception of man's duty to society, in place of that obedience to cosmopolitan orders and corporations which had been inculcated by the Catholic Church and the feudal obligation. Among the forces creative of the sense of nationhood were the English Common Law; the King's Peace and the King's Courts; the frequent intercourse of the representatives of distant shires and boroughs in the national council of Parliament; the new clothing industry based on national rather than municipal organization; the new literature and the new language common to all England. Finally, the action of the Tudor monarchy had abolished or depreciated all loyalties that intervened between the individual and the State, such as Protestantism purported to eliminate all that stood between the individual and God. The Elizabethan age is at once intensely national and intensely individualistic” (G. M. Trevelyan; History of England, p. 323. A New and Revised Edition. Longmans, Green & Co. 1939)

まことに簡にして要を得た概観であるが、我々にとつて重要なのは、こういう時代の知的精神的側面である。

このエリザベス時代の知的精神的側面を特徴付けるものは、三つまで有名な、ルネッサンスと宗教改革とであ

る。

ルネッサンスとは科学的探求心を含めてのギリシャ・ローマの古典の知識と精神とである。それは伊太利から移植されたのであるが、当時伊太利に於ては、それはスペイン人とジェズイット派の圧力によって萎縮しつつあった。それは英国に於て新たに開花したのもである。(G. M. Trevelyan; op. cit. p. 366) それは一般に教養人の知的財産であり、ヨーロッパを通じて言はば一つの cosmopolitan republic を造り出してきて、其処に住む人々は選ばれた人々であった。“This republic (of the classical renaissance) established itself in a Europe almost savage, supremely warlike and comparatively untaught—in it and not of it. Its citizens were a select people who lived and worked in the midst of the tumult of arms, the conflict of politics and the war of creeds which went on around them.” (T. M. Lindsay; Englishmen and the Classical Renaissance, in The Cambridge History of English Literature, Vol. III, p. I. Cambridge at the University Press. 1932) 本稿の主題であるフィリップ・シドニイはこのような選ばれた人々の一人、しかも最も優秀な一人であった。ところで一般大衆はどうであったか。この大衆を精神的に指導したのは、聖書であった。一体、ヨーロッパ各国を通じて宗教改革の指導者(ドイツのルツタア、フランス及びジュネーヴに於けるカルヴァン、スイスに於けるツウイングリ、スコットランドに於けるノックス)が主張した主眼点は、化体説(the doctrine of transubstantiation)、永貞童女マリアの崇拜及ローマ教皇の至上権の排撃、聖書の一般的使用と権威の確立、信仰によって義とせらるる必要(the need of justification)であった。(Sir Paul Hervey; The Oxford Companion to English Literature, p. 658. Third Edition, 1950. Oxford at the Clarendon Press.) としてこの聖書がヘリザベス女王の御代の終りまでに、一般の英国人にとっては、書物の中の書物となったのもである。“When she (Elizabeth) died, the maj-

ority of the English regarded themselves as ardent Protestants, and a great number of them were living religious lives based on Bible and Prayer Book." (G. M. Trevelyan; op. cit., p. 362) 聖書の教養人と一般大衆の知的位置について、Trevelyan は次のようにも言っている。 "For every Englishman who had read Sidney or Spenser, or had seen Shakespeare acted at the Globe, there were hundreds who had read or heard the Bible with close attention as the word of God." (G. M. Trevelyan; op. cit., p. 367) このようにして、ギリシヤ・ローマの古典と聖書とが英国人の文化を刺戟し拡張したのである。しかし、このように云うのは便宜的なことであつて、当時の知識人もギリシヤ・ローマの古典と共に、聖書を熱心に読み、その深刻な影響を受けたことは云うまでもない。フィリップ・シドニーもその「詩の弁護」("An Apologie for Poetrie")の中で、しばしば聖書に言及したし、また彼が年少時代の外遊中に、巴里で「聖バプソロミウの虐殺」に遭遇し、益々新教を擁護せんとする決意を固めたし、また、フランクフルトで知合になつてから死ぬまでシドニーを精神的にまた政治的に指導した老友 Hubert Languet は熱心な新教徒であつたという事情等をかえりみれば、その一端を伺うことが出来る。

また、当時の新教というのは、単に精神界のことにのみ限られていたわけではなく、それを擁護するということは、英国人の心の中では、愛国心、加特力的旧勢力を代表するスペインへの反抗、海上権、ドレイクのアメリカ探險、暗殺者の手から女王を守ること等と同一視せられていたのである。(G. M. Trevelyan; op. cit., p. 364) そして今此処に挙げた政治的社会的事項は、すべてシドニーの生涯に於ける重要な事件として殆んどそっくりそのままに現われている事柄でもあつた。

その一つの例として、シドニーが新教聯盟 (the Protestant League) を計画したことがあると云う事実を指摘しよう。

一五七七年に彼は女王の命を受けて、新たに帝位に即いたハプスブルグのロドルフ (Rodolph of Habsburg) に祝辞を述べ、且つ父である選挙侯バラティンを失ったその二子 Lewis と John of Casimir に弔詞を述べ、使節に選ばれた。そこで彼は使節としての使命を終った後で、宗教改革の原理を確立し、政治的自由を確保すべき最上の手段についてドイツの諸侯と会談する許可を願い出て許された。そこで、彼は Fulke Greville その他の使節団を従えて二月の終りにドイツに向って出発した。彼はドイツで Hubert Langnet に会ったが、この Langnet は彼のドイツ旅行の間ずっと彼に附添って助言を与えた。彼はドイツに於て何れの国も宗教闘争のために分裂しているのを見出した。彼が新教を奉ずるドイツの諸侯に説こうとしたのは、精神的宗教的勢力としての加特力教と、これと結合した政治的軍事的勢力としてのスペインに対抗して、宗教的改革の原理と民族的自由と独立を守るために、良心による契約 (a uniform bond of conscience) によって聯合して戦わなければならない、ということであった。理論的には、この計画は優れて居たばかりでなく、反動勢力の阻止のためにも必要であった。しかし、この計画は、民族的嫉視や外交的の困難に加うるに、新教の原理（その根底は批評的懷疑的反抗に在る）そのものが大同団結に反するものを持っていた。そのために、このシドニーの夢——当時の彼は政治の面に於て精魂を尽して活躍したい熱情に燃えていたのであるが——は、遂に実を結ぶに至らなかつた。(I. A. Symonds: Sir Philip Sidney, pp. 38—43. English Men of Letters Series. Pocket Edition. 1909)

この聯盟の計画は多分 Langnet (彼自身も新教聯盟を計画した) の助言も大いに寄与するところがあったと考

えられるのであるが、我々はこの計画の中にシドニーの政治家としての透察と、愛国的熱情を見ることが出来るのである。

以上、甚だ簡単ではあるが、エリザベス王朝時代の政治的社会的知的特点を挙げたわけであるが、シドニーはこういう政治的社会的雰囲気の中に呼吸し、生長し、自ら指導者となったのである。

フイリップ・シドニーは富裕でこぞなかつたが名門の出であり、当時の貴族階級の一員として享受し得る教養はすべてこれを身につけていた。

彼の性格に関しては、彼と親交のあつた Fulke Greville の述べている所が最もよく彼の性格を表現し得てゐると思われるので、次に引用する。“Of his youth I will report no other wonder but this, that though I lived with him, and knew him from a child, yet I never knew him other than a man; with such staidness of mind, lovely, and familiar gravity as carried grace and reverence above greater years. His talk ever of knowledge and his very play tending to enrich his mind. So as even his teachers found something to observe and learn above that which they had usually read or taught. Which eminence, by nature and industry, made his worthy father style sir Philip in my hearing (though I unseen) *Lumen familiae suae*.”

この Fulke Greville (一五五四——一六二八) はシドニーと同年の生まれであり、シドニーと同年同月同日にシユルーズベリー学校に入学した人で、シドニーの葬列に際してはその棺を担いだ一人であり、自分の墓標には、特に “Friend to Philip Sidney” と刻んだほど、シドニーに親しんだ人であつた。この Greville の記述でもわかる通り、シドニーは重厚な性格の人であつた。しかし、その重厚さは浪漫的憂鬱に沈湎することなく、またそ

の反対の鈍重でもなく、規矩を踏みはずすことなくして、同時に極めて行動的であった。

彼はその美貌と騎士的修養と教養の広さにより、エリザベス女王に寵愛され、私的公的外遊の場合を除いては、長期にわたって君側を離れることを許されなかった。しかし彼は君寵に甘えることなく、所謂 the French match が現実化しようとした時は、よく当時の実現を見極めて、面を犯して諫言し、また、Essex の如く奔放な行動の結果、反乱を惹起して自ら死を招くというような極端なことをしなかった。

彼は生え抜きの宮廷人であったが、当時の宮廷の虚飾、虚偽、狡智、浅薄、謀略、退屈、党派的争いに堪え切れず、その騎士的性格からして、より行動的な生活を望み、遂には秘かに同志をつのつて西印度諸島へ渡航しようと考えた。

彼は自分の恋愛の経過を記録した sonnet-sequence とある "Astrophel and Stella" を書き、詩に対するピューリタン派の攻撃に対しては "An Apoloquio for Poetrie" を書いて詩の本質と価値を弁護し、また長大な散文のロマンズ "Arcadia" を書いた。しかし、彼は職業的な創作家でもなく、専門的な批評家でもなかった。こういう職業的専門家的タイプは、遙かに後代になってジャーナリズムが確立されてから現われるのである。彼は日常の仕事である宮廷勤務の余暇に文学的活動をしたにすぎない。この点に就いて Fulke Greville は次のように言っている。"If his purpose had been to leave his memory in books, I am confident, in the right use of logic, philosophy, history, and poetry, nay even in the most ingenious of mechanical arts, he would have shewed such tracts of a searching and judicious spirit as the professors of every faculty would have striven no less for him than the seven cities did to have Homer of their sept. But the truth is: his end was not writing,

even while he wrote ; nor his knowledge moulded for tables or schools ; but both his wit and understanding bent upon his heart, to make himself and others, not in words or opinion, but in life and action, good and great."

即ち、彼は書くこと自体が目的ではなく、更にまた、書くことよりも「生活と行動に於て」意義のあるもの (good and great) となることを企図し、他の人々もこれを期待した。しかし、彼は決して詩をビュリータン派の如く蛇謁視することなく、詩を学芸の最高なるものと考え、その目的は人を vertuous action に導くことに在ると主張したのである。彼は言わばこの vertuous action の具現者であつた。彼は實際騎士道の模範としてすべての人々から尊敬され、親まれたのである。彼は常に公務を先にし、詩作に耽つて勤務をおろそかにしたり、憂愁に胸を閉ざされて湖畔をさまよつたりはしなかつた。彼には文学的意識の過剰というような近代の精神傾向は全くないと言つてよ。

今、私は騎士道の模範という言葉を使ったが、勿論、当時はすでに騎士というものは現実の社会組織の中に存在して居らず、封建時代の衰微に伴い、中世的騎士はすでにより近代的な宮廷人に姿を変えていた。しかし、騎士道的精神は尚宮廷人の心の中に生きていて、時至れば発露することがあつた。そして私はシドニーの生涯の中にこの騎士的性格の優れた現われを見ることが出来ると思つてゐる。 Cf. "Absolutism had everywhere crushed the energies of feudalism ; the knight had been transformed into the courtier What we do find there (i. e. in the *Faerie Queene*) is the chivalrous spirit, such as still survived in the soul of Sidney and a few others, uttering itself, when opportunity offers,....." (W. J. Courthope ; the Poetry of Spenser, in

the Cambridge Hist. of English Literature, Vol III, pp. 235—6)

この vertuous action に関聯して思ひ出されるのは、どの伝記家も書いてゐる事實であるが、シドニーが戦傷を受けて後方に送還される際の行動である。次の記述は主として E. S. Shuckburgh によつたものである。（E. S. Shuckburgh; *Introduction to An Apologie for Poetrie*. The Pitt Press Series. Cambridge; at the University Press. 1915）

一五八六年九月二十二日（*と*）と *と* Shuckburgh は十月二日の事件とつづるが、Symonds 始めその他の人々は何れも九月二十二日の事件としてゐる（*と*）*と*はそれによることにする）*と* Essex, Audley, Stanley, Pelham, Russel 及び Sidney 兄弟（Philip and Robert）等が率ゐられた約五十名の英軍の小部隊（Symonds によれば約二百名の騎兵）は和蘭の Zutphen の近くに陣を布いてゐた。それは Zutphen に入らうとするスペイン軍の輸送隊を阻止せんがためであつた。それは霧の深い朝であつたが、英軍が輸送隊の車の軋る音を聞いた時、突然に霧が晴れてこの輸送隊が約三千の軍隊（Symonds によれば約一千名）に護衛されてゐるのが発見された。英軍の小部隊は三回突撃を敢行し、三回敵陣を撃破した。しかし、この三回目の突撃に際し、シドニーは膝の上に敵弾を受けた。この敵弾は彼の大腿骨をくだいてゐた。彼は馬から降されて後送されることになつた。その際の行動を Milke Greville に語らせた。 “In which sad progress, passing along by the rest of the army, where his uncle the General was, and being thirstie with excess of bleeding, be called for drink, which was presently brought him: but as he was putting the bottle to his mouth, he saw a poor Souldier carryed along, who had eaten his last at the same Feast, Gastly casting up his eyes at the bottle. Which Sir Philip

perceiving, took it from his head, before he drank, and delivered it to the poor man, with these words, *Thy necessitie is yet greater than mine.*"

この行為こそ virtuous actorn の最もよい実例だといふことが出来る。

シドニイはこのような高貴な資性の持主であつたが、その学芸に対する熱意と宮廷に於ける地位からして、その交友關係は広く、文学政治外交にまたがり、且つ国際的であつたが、彼ほど立派な且つ永続的な交友關係に恵まれた人は稀であつたと云ふことが出来る。その中で彼に対して指導的な役割を果した年長者は Francis Walsingham (一五三〇——一五九〇) と Hubert Languet とであつた。此等二人は言わばシドニイの政治顧問であつた。

Walsingham はシドニイが最初に渡仏した時の駐仏大使であり、後にその女 Frances はシドニイ夫人となつた。Walsingham よりも精神的にみて更に重要なのは Hubert Languet (一五一八——一五八一) である。Languet はブルゴーニュのヴェイトオ (Vitieux) に生まれた。父はその時の市長であつた。彼は幼にしてギリシヤ語、ラテン語に秀で、後、ポアティエの大学で、法律、神学、科学を学び、また、ポローニヤ及びパドゥアの各大学で学び、パドゥア大学から学位を贈られた。(一五四八年) 彼はパドゥア滞在中にメランヒトン (Melancthon) の著作を読んで大きな感化を受けて新教徒となり、メランヒトンの死ぬまで (一五六〇)、ウィッテンバーグに滞在した。彼は広くヨーロッパ各地を旅行した。後、一五五九年サクソニイの選帝侯オーガスタス一世に招かれて仕えた。彼は外交に於て、特に新教徒を組織するのに才能を示した。彼は一五六一年から一五七二年まで選帝侯を代表してフランス宮廷に派遣されていた。彼は一五七二年にシャルル九世の前で新教徒の貴族達のために激烈

に弁護した。そのために、一五七二年の「聖バアソロミユウの虐殺」に際しては危く殺害されるところであった。彼は一五七三年から七七年まで選帝侯を代表して、皇帝の宮廷に駐在した。彼は晩年は主として和蘭に滞在し、また、オレンヂ公ウイリアム（William the Silent, prince of Orange）の顧問でもあった。

彼の手紙は十六世紀の研究にとって重要だと考えられて居り、選帝侯宛の三百二十九通、その他数百通の手紙が保存され出版されている。特に我々にとって重要なのはシドニイ宛のそれであるが、それは六十九通あって、一五七三年四月二十二日から一五八〇年十月二十八日までの期間にわたり、一六三三年にフランクフトで出版され、後、S. A. Pears によって英訳された（London, 1845）。彼に関する伝記も一七〇〇年以來数種類公刊されてゐる。（Encyclopaedia Britannica, Vol. 16, Eleventh Edition, 1911）

この略歴を見てもわかる通り、ランゲはヒューマニストであり、熱心な新教徒であり、且つ有能な外交官であった。彼がシドニイに出会つたのは、「聖ミアソロミユウ」の動乱を逃れてフランクフルトに行つた時のことであつた。その時、シドニイは十九歳で、ランゲは五十五歳であつた。彼は少年シドニイの中に優れた資性を認め、これを愛した。彼はシドニイと共に旅行し、別れて後はたえずラテン語の手紙を送つて、常に変わらざる愛情を以てシドニイの啓発に努めた。その手紙について J. A. Symonds は “a long series of Latin letters from Languet to his friend, which breathes the tenderest spirit of affection, mingled with wise counsel and ever-watchful thought for the youngman's higher interest” と述べ、また “……for the tone of Languet's correspondence can only be matched by that Shakespeare in the *sonnets* written for his unknown friend” と述べた（J. A. Symonds; op. cit., p. 28）

シドニーが少年期から青年期にわたって、この優れた年長の友人——ヨーロッパの各地を歴遊して諸国の事情に通じ、また外交官として各国の勢力関係について豊富な知識を持っている——に、常に指導されたことは、彼にとつて非常に有益であり、幸福であつた。ランゲのシドニーに対する影響によつて、Symonds は次のように言ひてゐる。“No man was more competent to guide Sidney through the labyrinth of European intrigues, to unmask the corruption hidden underneath the splendours of the Valois Court, and to instil into his mind those principles of conduct which governed reformed statesmen in those troubled times. (J. A. Symonds; op. cit., p. 27)

次に同年輩の親友として Fulke Greville (一五五四——一六二八) の名を逸することが出来ない。彼は Warwickshire の Beauchamp Court に生まれた。彼は Sir Fulke Greville の独り子で、シドニーと同時にシエールズベリイ学校に入学し、ケンブリッジ卒業後、一五七六年にフィリップの父でありウエールズの総督であつた Sir Henry Sidney によつて the Marches (England と Wales の辺境地方) に或る地位を与えられたが、翌年これを辞してフィリップと共に宮廷に入った。彼もエリザベス女王のお気に入りであつた。彼はフィリップと共に “Areopagus” (文学団体) の一員として文学活動に参加した。彼はフィリップの西印度への渡航計画に参加した一人であつた。フィリップの死後、Sir Edward Dyer と共にその蔵書を譲り受けた。その後種々の官職に歴任し、また、四回にわたつて Warwickshire 選出の議員となり、一六二一年にシェイムズ一世によつて Baron Brooke として貴族に列せられた。彼は一六二八年に死んだが、その墓標には自ら選んであつた “Folk Grevill Servant to Queene Elizabeth Counsellor to King James Friend to Sir Philip Sidney Trophaeum Pec-

cati.”と云う句が刻まれている。彼はシドニーのための追悼詩、その他の詩作 *Alaham, Mustapha* 等の悲劇を書いたが、彼の名声が後世に残ったのは、主としてその親反のために書いた伝記を通じてであった。この伝記の full-title は次の通りである。“The Life of the Renowned Sr. Philip Sidney. With the true Interest of England as it then stood in relation to all Forrain Princes; and particularly for suppressing the power of Spain Stated by Him. His Principall Actions, Counsels, Designes, and Death. Together with a short account of the Maximes and Policies used by Queen Elizabeth in her Government” (Encyclopaedia Britannica, Vol. 4. Eleventh Edition)

この友人はシドニーに言わば影の如くつきそい、温かい友情と尊敬の念を以て、その言動を記録し、後代の伝記の準拠となるべきものを残したのである。

シドニーはこのように、年長者にも、同年輩にも、類稀な深い純粋な友情を見出すことが出来た極めて幸福な人であった。

今、Fulke Greville に説き及んだ際、当時の文学団体であった Arcopagus の存在に言及したが、次にこの文学団体に就いて一言しよう。

シドニーは多忙なしかし彼にとっては退屈な宮廷生活の中で、Gabriel Harvey (一五四五——一六三〇) や Edmund Spenser (一五五三——一五九九) と友好関係を結んだ。シドニーがハアヴェイと出会ったのは、彼がエリザベス女王に顧従して Andley End と云う所に行った時のことであった。其処で女王は何人かのケンブリッジの学者を接見した。その中にハアヴェイがいたのである。彼は Pembroke Hall の fellow をしていた

時に、スペインサアと知合いになり、このハアヴェイを通してシドニイはスペインサアとも知合いになったのである。そしてこのスペインサアやシドニイに、シドニイの親友である Fulke Greville や Edward Dyer が加わり、一つの文学会 (academy) が形成された。それは Areopagus と名付けられたが、それは多分、ロレンツオ時代のフインツェの Academy (これも同じ名称を持っていたのであるが) を模倣したものであった。同時に、それはまた、Balf が少し以前に巴里に樹立した academy のことが、若い詩人達の心の中に浮かんでいたのにも由つたのである。(Lewis Einstein: *The Italian Renaissance in England*, pp. 357—8. Columbia University Press. 1927) 当時この academy 形成の気運は動じて居り、早くは William Thomas が一五四九年にフインツェの academy を、彼が伊太利へ見た最も興味あふものの一つとして挙げたことがある。大体、シドニイ達の Areopagus のことに就ては、その原則とてもしつべきものを除いては殆んど詳しいことが判明してはいない。

Sir Paul Hervey はこの集のこのことば “a club formed chiefly for the purpose of naturalizing the classical metres in English verse, which included Spenser, Fulke Greville, Harvey, Dyer, and others” (Sir Paul Hervey; *op. cit.*, p. 723) と言つてゐるが、この場合の others が誰々であるか、はゞきりしない。この academy の会員としては、シドニイ、スペインサア、グレヴィル、ダイアを挙げ、ハアヴェイも同じ原理の主張者として且つ先輩格として何等かの程度に於て参加したと見るのが正しいようである。この会合のことに就いてスペインサアは、当時 Fellow of Trinitie Hall in Cambridge であつたハアヴェイに宛てた手紙の中で次のように書いてゐる。

“And nowe they (i. e. Master Sidney and Master Dyer) have proclaimed in their ἀποδείξη πρῶτα a generall surceasing and silence of balde Rymers, and also of the very beste to: in stade whereof, they

have, by autho(ri)tye of their whole, Senate prescribed certain Lawes and rules of Quantities of English sillables for English Verse, having had thereof already greate practise, and drawn mee to their faction." (G. Gregory Smith; Elizabethan Critical Essays, Vol. I. p. 87) この文は、*Elizabethan Critical Essays*, Vol. I. p. 87 の「Your new-founded ἀρετων παράγω I honour more than you will or can suppose, and made greater accompte of the two worthy Gentlemanne than of two hundreth *Dionisii Areopagitae*, or the verye noblest Senatours that ever Athens dydde affourde of that number." (G. Gregory Smith; op. cit., Vol. I, p. 94) 及び「宛の別な手紙の中心スペンサーは次のように言ふ。『I would hastily wish you would either send me the Rules and Precepts of Arte, which you observe in Quantities, or els follow mine, that M. Philip Sidney gaue me, being the very same which M. Draut devised, but enlarged with M. Sidney's own indgement, and augmented with my Observations, that we might both accorde and agree in one, leaste we ouerthrowne one an other and be ouerthrowne of the rest.' (G. Gregory Smith; op. cit., Vol. I, p. 99)

此等の引用によって多少とも「アヴェイ」と「スペンサー」の、従って「スペンサー」を通じての「シドニー」や他の「会員達」との關係を知ることが出来、同時にまた「Areopagus」という文学団体の消息の一端を伺うことが出来ると考えられる。

「Sir Paul Hervey」からの引用や「メンサー」の手紙の一節によって知り得られるように、この文学団体の目的は「Classical metres」や「英語の詩」を「書」うことである。「Classical metres, which Tolomei had

long before attempted to revive in Italy, were tried by Sidney and Spenser, and found apologists in Drant and Harvey." (Lewis Einstein; op. cit., p. 357) シドニーも幾つかの classical metres を試み、それは散文の *Raynolds Arcadia* の中に見出されるのが、価値のあるものではない、要するに文学史的興味を持っているにすぎない。この点について Symonds は次のように言っている。"They are not very valuable; but they are interesting as showing what the literary temper of England was, before the publication of the *Faery Queen* and the overwhelming series of the romantic dramas decided the fate of English poetry." (J. A. Symonds; op. cit., p. 80) このシドニーの試みに対する批評は、また他の会員にも適用し得るであろう。

要するにこの *Areopagus* は、大きな文学運動とならず、その間にか消滅してしまつたのであるが、当時の古典主義的な文学意識の一端を示すものと云うことが出来る。そしてシドニーは幾つかの classical metres を試みたとしても、その「詩の弁護」の中では、この *Areopagus* に就いて何等言及してゐないのである。

一体、シドニーが文学活動を始める前の英国文学はどんな状態にあつたか。当時はチョオサアが死んでから約百八十年ほど経っていた。それ以後第一流の詩人は現われていなかった。シドニー自身がその「詩の弁護」の中で英国の優れた詩人文学者としてあげてゐるのはチョオサア、*Mirror of Magistrates* の作者、Earle of Surrie, *Shepherds Calendar* の作者位にすぎない。(cf. G. Gregory Smith; op. cit., Vol. p. 196) (そのとも、現在の我々からすれば、更に多くの名を附け加えることが出来るのではあるが。) としてスペンサアの *The Faerie Queene* の公刊、シェイクスピアの劇作家としての活動は、シドニーの死後のことであつた。もし彼が戦傷死をせずに生き延びて、完成されたスペンサンの長篇詩、上演されたシェイクスピアの作品(円熟期

の）を見ることが出来たならば、彼の詩論がどんな変貌を遂げ、どのような創作欲を刺戟されたであろうか、と想像して来ると、その早逝が一層惜しまれるのである。

大体、シドニイの文学活動の時期は、一五七八年、Wanstead の Leicester 家で行われた女王招宴の際に上演された *The Lady of the May* (a rural masque) に始まり、*Arcadia* の創作が一五八〇年に始まり、*Astrophel and Stella* の創作が一五八一年と推定され、また *An Apuloogie for Poetrie* が一五八一年——三年の間に書かれたと考えられるので、一五八四年頃には終つていたといふことが出来る。従つて彼の文学活動は僅か五六六年にすぎない。その創作活動の時期がシドニイと同じように僅かに数年間にすぎなかつた後代のキイツなどと比較してみると、この数年間の創作の量は必ずしも大であるとは言えない。しかし、シドニイの価値は量よりも、当時の他の詩人や詩論家の間にあつて、本質的なものを把え、獨創性の閃きを示した点にあるといふことが出来よう。特に、彼の詩論に就いて、G. Sainsbury に甚だ興味ある記述が見出されるので、ここに引用しよう。“Our two chief English-writing authorities, Mr. Symonds and Mr. Spingarn, are at odds as to Sidney's indebtedness to the Italians. He quotes them but sparingly—Petrarch, Boccaccio, Landino, among older writers, Præcastro and Scaliger alone, I think, of the moderns—and Mr. Symonds thought that he owed them little or nothing. Mr. Spingarn, on the other hand, represents him as following them all in general, and Minturno in particular. As usual, it is a case of the gold and silver shield. My own reading of the Italian writers of 1530—80 leaves me in no doubt that Sidney knew them, or some of them, pretty well. But his *attitude* is very different from theirs as a whole, and already significant of some specially English character.”

eristics in criticism." (G. Sainsbury; History of Criticism and Literary Taste in Europe, Vol. II, p. 171. foot-note)

フイリップ・シドニーは美貌の持主であつた、と共に、極めて優れた資性の持主であつた。彼の生涯をふりかえつてみる時、私はPlatoがその「共和国」で言つたような「美しい魂と美しい姿態の調和した人」を常に思ひ出す。そしてこのプレイトオの言葉こそ、シドニーに最も適した讃辞であると考えるのである。

"And when a beautiful soul harmonizes with a beautiful form, and the two are cast in one mould, that will be the fairest of sights to him who has an eye to see it?"

The fairest, indeed.

And the fairest is also the loveliest.

That may be assumed."

(Plato; The Republic, BK III, p. 365. The Dialogues of Plato, Selections from the Translation of Benjamin Jowett, edited with an introduction by William Chase Greene, Boni and Liveright, New York, 1927.)

附記。嘗て私は「英国詩論史(上)——コウルリヂ研究の一助として——(同志社文学パンフレット第二輯、昭和十三年十月)に於て、エリザベス王朝時代の代表的詩論家としてシドニー、ベイコン、ジョンソンの三人を挙げて論じたことがある。しかし、その時のシドニーに関する部分は独立したものでなかつた。この小著は英国の意識的な詩論(文学批評)はエリザベス王朝に始まると考え、その最初の代表者としてシドニーを取り上げたのである。当時、私は詩論を中心としてコウルリヂ

をまとめて読んでいたので、英国詩論史上に於ける彼の位置を多少とも明らかにする必要を感じ、コウルリヂを中心に置いて、彼以前と彼以後との比較研究を企てたのであるが、公刊された部分はポウプまでであった。もつとも、コウルリヂと現代の批評との関係は、別の機会に発表した「コウルリヂの Imagination 論（同志社文学コウルリヂ特輯号、昭和八年十二月）の最後の部分に於て論じたことがある。この「フリーリップ・シドニーについて」は、大体「英国詩論史（上）」を背景としつつ、シドニーを当時よりも詳細に考察するつもりで、序論的な意味で書かれた概観である。そして当然言及されるべき、或はもつと詳説すべき諸々の点、たとえば、彼の詩人としての活動、また交友関係に於けるジョルダノ・ブルーノやエドモンド・スペンサー等との関係に就いては、何れ他の機会を持ちたいと思う（尚、この小文は最初の六行の後に、かなり詳細な年表を附し、シドニーの生涯の出来事を逐次的に記録したのであるが、枚数の関係で省くことにした。そのためにシドニーの生涯の記述が他の部分に比して鮮明度を欠くが、止むを得ない。これも別の機会を持ちたいと思ふ）。

（一九五二年八月）